

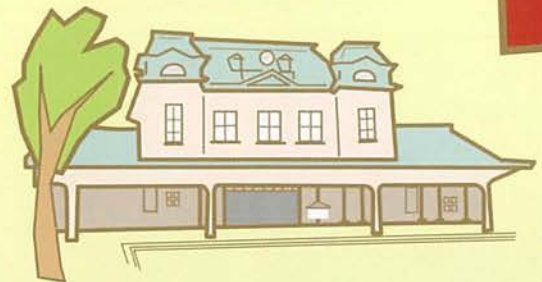
きた きゅう しゅう

# 北九州

どう とく きょう ど し りょう

# 道徳郷土資料

じ どう せい と よう  
児童生徒用



平成26年

北九州市教育委員会



はじめに

私たちの住む北九州市には、すばらしい自然はもちろん、受け継いでいきたい伝統や文化が数多くあり、郷土の発展につくした人々もたくさんいます。その中から、みなさんに特に読んでもらいたいお話を三十話にまとめました。

この本にまとめられているお話は、三つの内容となっています。

- 北九州市に住んでいた人たちの生き方。
- 北九州市の伝統や文化、祭りや伝説、言い伝え等。
- 北九州市の自然などに対する誇りや愛着へとつながるもの。

この本を読みながら、私たちの住む北九州市のよさやすばらしさを見つけてみてください。また、自分の仕事に誇りを持ち、周りの人たちにやさしくする、そんなみなさんの豊かな心を自分で見つけてくれることを期待しています。

先生方へ

「北九州市道徳郷土資料」は、北九州市のよさに触れることを通して、子どもたちに豊かな心を育んでもらいたいという願いをもって作成されたものです。平成二十三年度の教師用の配布に続き、今年度は、一人でも多くの児童生徒が手にとって読むことができるようにと、児童生徒用を配布することにしました。道徳の時間等で、児童生徒が郷土の先人の生き方や伝統文化のよさにふれ、郷土のよさやすばらしさに気付くとともに、一人一人の豊かな心を引き出す資料として活用していただくようお願いいたします。

最後に、本書「北九州市道徳郷土資料」（児童生徒用）の作成にあたり、ご協力していただいた道徳郷土資料編集委員会の委員の皆様及び関係者の皆様に深くお礼を申し上げます。

平成二十六年 二月

北九州市教育委員会 指導第一課長 大庭 正美

## 目 次

はじめに .....	1
＜低学年＞	
1 しんくろうさん (門司区) .....	3
2 あきかぜに ゆれるコスモス (若松区) .....	5
3 わたしの ハムちゃん (小倉北区) .....	7
＜中学年＞	
4 ほこりのかがみ (門司区) .....	9
5 学校の宝物～ユーカリの木～ (門司区) .....	12
6 家族みんなで (小倉北区) .....	14
7 小倉南区の海と山～平尾台と曾根干潟～ (小倉南区) .....	17
8 特別な味 (若松区) .....	19
9 言葉はやさしく心は深く～詩人 みずかみかずよ～ (八幡東区) .....	22
10 かな子の夏休み (八幡東区) .....	25
11 山かさをつくる (八幡西区) .....	28
12 洞海湾をおよぎわたった子馬ものがたり (戸畑区) .....	31
13 郷土が生んだマラソンランナー・君原健二 (戸畑区) .....	33
＜高学年＞	
14 残されたかばん (門司区) .....	35
15 長崎の鐘 (小倉北区) .....	38
16 アユがもどってきた (小倉北区) .....	41
17 たった一人の和太鼓職人 (小倉北区) .....	45
18 ミスター・トルネード 藤田哲也 (小倉南区) .....	47
19 大連からのプレゼント (若松区) .....	50
20 折尾神楽と出会って (八幡西区) .....	52
21 取りもどせ 青い空と海 (八幡西区) .....	55
＜中学校＞	
22 焚き火に情熱を注いだ一人の僧 (門司区) .....	58
23 アナタに会いたい～「いぬのおまわりさん」大石真由美～ (門司区) .....	62
24 地図にかけた生涯 (小倉北区) .....	68
25 村を救ったお糸の物語 (小倉南区) .....	72
26 石炭の神様～佐藤慶太郎伝～ (若松区) .....	78
27 公害の町から環境都市北九州へ (八幡東区) .....	81
28 理想を求めて海外で生きる (川原尚行) (八幡東区) .....	85
29 ドリーム～ギラヴァンツ北九州と共に～ (八幡西区) .....	88
30 孫次胤に夢をのせて (戸畑区) .....	93
平成21～22年度 北九州道徳郷土資料編集委員 .....	96

### 3 わたしの ハムちゃん

わたしの いえには ハムスターの ハムちゃんが います。とても かわいいので、まいにち かごから だして あそんでいます。でも ハムちゃんの おせわは たいへんです。一しゅうかんに いちど、かごの そうじを しなくては なりません。しかも、かごの中には ふんが たくさん たまっっていて、きもちわるいからです。だから いつも いやいや そうじを しています。

にちようびに いたうづのもりこうえんに かぞくで いくことになりました。わたしは おおよろこびで 出かけました。 キリンや ゾウ など いろいろな しゅるいの どうぶつを たくさん みました。

わたしは、ひろい のはらに 二本あしで たっている かわいらしい どうぶつを みつけました。あしを とめて この どうぶつのかぞくを みて いると、そばに いた しいくいんさんが はなしてくれました。

「この どうぶつは、ミーアキャットと います。このまえ ミーアキャットの あかちゃんが うまれました。しかし、うまれた あかちゃんは たいじゅうが すくなく おかあさんは ミルクが できなかったのです、しんで しまいそうでした。とても しんぱいした わたしたちは いっしょうけんめいに ミルクを あげました。ちいさくて ミルクを のむことが できない あかちゃんが ひとくち のんで



いたうづのもりのミーアキャット

くれたときは、とてもうれしかったです。また、四じかんごとにミルクをあげないといけないのでよるもねむれないひが、一かげつもつづきました。三かげつのあいだひつしにおせわをしたので、とてもげんきにそだってくれました。かわいがってやってくださいね。」

しいくいんさんのはなしをきいて、とてもやさしいなおもいました。

「げんきにそだってね。」  
わたしは、かわいいミーアキャットたちに、そうこえをかけ、いとうづのもりこうえんからいえにかえりました。

いえにかえるとまつさきにハムちゃんのかごのそばにきました。

「ハムちゃん、げんきにそだってね。」

とやさしくこえをかけながらかごのそうじをすすんではじめました。



ミーアキャットのあかちゃん

## 6 家族みんなで

宿題を終わらせて、一休みしようと、やっとテレビゲームのスイッチを入れようとしたときのことだった。

「優一、ハムちゃんの家のそうじをしない。先週からそうじしておくように言っておいたでしょう。」

と、お母さんからしかられた。家で飼っているハムスターのかごのそうじを先週からするように言われていたのだが、毎日の宿題を理由にしていないのだ。しないといけないことは分かっているのだけれど、今日の宿題をたった今終わらせたばかりなので、そうじしようという気持ちにはなれなかった。

「後でそうじするよ。」

と、ぼくはテレビのスイッチを入れてソファアにすわった。

すると、お母さんは、

「『後で』って、いつもそれでしよう。言われたときにすぐにしなさい。」

とおこつて、テレビゲームのスイッチをパチンと切った。約束を守らなかったことは悪いと分かっているのだが、スイッチをけされてしまったので、ぼくもカチンときた。後ですると言ったのに、お母さんはぼくの気持ちを少しも分かってくれない。くやしい気持ちやかなしい気持ちでイライラしながら、ぼくは勉強部屋へ向かった。ぼくだっていそがしいんだ。少しくらい休ませてくれてもいいだろう。そんな気持ちでつくえにすわっていると、二人のやり取りを聞いていたお父さんが部屋に入ってきた。

お父さんはやさしい声で、

「どうしてすぐにハムちゃんの家のそうじをしなかったんだ。」





本村の漁港



千畳敷の石だたみ

とぼくに声をかけてきた。でも、うまく返事ができずにそのままじつとしていた。

「ハムちゃんは優一が誕生日のプレゼントにほしいと言ったから買ってもらったんだよね。だから、優一にしつかりとお世話をしてほしいと、お父さんもお母さんも思っているんだけどな…。」

お父さんはそう言うのと、とちゅうで話をやめて、

「そうだ、明日は土曜日だから二人で魚釣りに行こうか。」

と急に明るい声でそう言った。

次の日の土曜日、ぼくとお父さんは藍島行きの渡船発着所から船のこくら丸に乗って藍島に魚釣りに出かけた。

魚釣りの大すきなぼくは、ときどきお父さんにこのお気に入りの藍島につれてきてもらう。貝やサメの歯の化石が見つかる千畳敷の石だたみがあるなど、北九州市の自然がたっぷりとおもしろいところだ。

ぼくたちはいつも本村の漁港にある波止場で魚釣りをする。

二人で競うように魚釣りをした。魚釣りのおかげで昨日のイライラがうそのようにふき飛んでいた。

魚釣りを終えて帰る前に、お父さんがアジを包丁でさばき始めた。

「お父さん、魚をさばくことができるの。すごいな。」

「いやね、魚をさばいて家に帰ると、お母さんはすぐに料理することができるだろう。パートで働いた後、家で家事もしているから、お母さんはいつもつかれているんだよ。たまの休みの日くらい楽をさせてやりたいんだ。そうだ、今日はお父さんがアジのさしみを作ってみんなで食べよう。うん、それがいい。」

お父さんはノリノリで話していた。お父さんはやさしいんだなと思いつつ話聞いていた。お父さんは、急に真面目な顔になつて話を続けた。

「なあ、優一。お父さんたち家族三人が楽しく過ごすためには、三人がおたがいに思ひやったり、協力したりすることが大切だよ。だから、優一にも家の仕事をするときに協力してほしいんだ。お母さんにまかされた仕事は、気持ちよく進んでほしい。」

「分かつてはいるけど、お母さんはすぐにおこるから、したくなくなるんだよ。昨日だって、後でそうじするつて言ったのに、急にゲームのスイッチを切るからさあ…。」

ぼくも自分の気持ちを正直に話した。

「なるほどね。優一の気持ちも分かるけど、約束が守れなかったのだから、しかられることは仕方のないことだぞ。これは、しっかりと反省しなさい。お母さんもつかれているから、同じことを何度も言うのがつらいんだよ。このことも分かつてほしいな。そのことだけではなくて、優一の働くすがたも見たかったんだと思うよ。ハムちゃんをプレゼントしたとき、優一が一生けんめいにそうじをしているのを見て、本当にうれしそうに『あんなにすみのほうまで上手にそうじしているよ。たよりになりそうだね。』と話していたんだ。その話を聞いて、お父さんもうれしくなったな。」

お父さんの話を聞いて、お母さんがどうしてあんなにおこつたのか、少し分かったような気がした。一生けんめいにそうじをするところが「たよりになる」か…。ぼくも何だかうれしくなった。また、魚をさばいてお母さんに樂をさせようと思うお父さんも、とてもかっこういいなと思った。

家に帰ると、いつものようにお母さんはせんたく物をたたんでいた。お父さんはお母さんの顔を見ながらニコニコして、つつた魚を料理し始めた。いつもはテレビゲームのスイッチを入れるぼくだけ、今日は真つ先にハムちゃんの家へと向かった。



## 9 言葉はやさしく心は深く く 詩人 みずかみかずよ

JR八幡ジエイアルやはたえき駅から東へ四百メートルほど行ったところの小伊藤山公園こいとやまにある、「ふきのとう」の詩碑を知っていますか。この詩の作者であるみずかみかずよさんは、八幡市（現在の北九州市）に生まれ、北九州市を代表する詩人の一人です。

作者のみずかみかずよさんは、皿倉山さらくらのふもとに住み、詩や童話を書きました。かずよさんの作品の中に出てくる町や自然は、私たちの暮らす北九州の景色そのものです。

かずよさんは、小さいころに両親を亡なくし、岡山の親せきの家にひきとられました。また、このころ日本は、大きな戦争をしていました。さびしさや心細さの中で、時には大人たちの言葉に傷きずつき、時にはなぐさめられながら、「言葉には、生命があり、力があり、人の心を生かすことも殺すこともできるもの」と、言葉のもつ力を感じ取ったのです。

かずよさんは、絵をかいいたり歌ったり、劇遊げきびなどが好きな子どもでした。学校の先生のオルガンに合わせておどったり歌ったり、劇ではプログラムからふり付け、役決め、演出、あいさつまですべて考えるほどでした。

かずよさんにはもう一つ楽しみにしていたことがありました。それは、先生が教室の後ろの黒板に色チョークで絵をそえて書いてくださる詩を読むことでした。先生のオルガンに合わせ、先生の声に合わせてその詩を歌いました。声に出すこと、言葉を耳できくことが、みんなの気持ちをひらかせ、想像そうぞうをふくらませました。

かずよさんもたくさんの詩を書きました。先生は、かずよさんの詩にも絵をそえて黒板に書いてくださいました。八幡から転校し、なかなかなじめなかったかずよさんでしたが、学校に行くのがうれしくて、友達からも詩をほめられ、みんながわあつとよってきて、仲良くしてくれました。

戦後、戦地からもどつてきた兄と八幡にもどり、中学生になったかずよさんは、ますます詩を書くことに熱中しました。

かずよさんはいつでも、「言葉はやさしく、心は深く」と、自分に言い聞かせながら詩を作りました。

「私の詩を読んでくれた人が喜んでくれるように。笑顔になるように。」

だれにでもわかりやすい言葉でつづられた詩には、かずよさんのやさしい気持ちがあふれています。

高校を卒業後、幼稚園ようちえんの先生をしながら児童文学誌「小さい旗」に参加し、同人（仲間のこと）の水上平吉みずかみへいきちさんと結婚したかずよさんは、たくさんの詩を発表しました。しかし、当時「小さい旗」には、詩を書く人が少なく、アドバイスや批評ひひょうをもらうことができずに、かずよさんは悩みました。

「私の詩って、どうせ読まれていないのよ。空いたところの穴あなうめでしかないわ。」

と、平吉さんに言ったこともありました。しかし、かずよさんは、書くことをやめようとは思いませんでした。

そんなとき、新聞社が主催する「愛の詩キャンペーン」に応募したところ、金賞一席を受賞しました。審査員の本格的な批評を受け、自信をもったかずよさんは、詩を書き続けることを決心しました。

かずよさんにとって大きな力となったのは、全国の詩人や児童文学者たち、そして読んでくれる人たちからの応援でした。とりわけ、「大造じいさんとガン」などの作品で知られる児童文学者の椋鳩十むくはとじゅうさんは、かずよさんを熱心にはげました。「あなたの詩はりんりんと胸をうちます。」という椋さんの言葉に、かずよさんは強く勇気づけられました。

また、一番近くで応援してくれるのは、夫の平吉さんでした。まだ若く給料が少なくてでしたが、お金を借りるなどして、自費出版でかずよさんの詩集を出すことにしました。かずよさんもそれに応えるように詩を書きました。

かずよさんは、自然が大好き。家の庭はたくさんの花でいっぱいでした。家の近くの皿倉山もかずよさんにとっては庭のようなもの。草や木や虫や動物たちを観察しては詩を書きました。

一九八四年、体調をくずしたかずよさんは、その後入院と手術をくり返しました。病名は末期のガンでした。

「詩集を出そう。」

平吉さんは病名をひみつにして、かずよさんに詩集の出版をすすめました。病院のベッドの上でも、かずよさんは詩をつくり続けました。

一九八八年十月、「ありがとう」の言葉を残し、かずよさんは五十三才で亡くなりました。

かずよさんが残した詩は五〇〇編以上あります。また、かずよさんは亡くなる前、「歌える詩を書きたい」と周囲の人に話していたそうです。死後、かずよさんの詩に曲が付けられ、「燃える樹」「めばえ」など、様々な歌が生まれました。

水上平吉著「あつぱれかずよ」（児童文学誌「小さい旗」と、

北九州市立文学館主催「みずかみかずよ展」の解説文より再構成したものです。



みずかみかずよ文学碑  
八幡東区尾倉 小伊藤山公園内

## 山かさをつくる

直人は、友だちをさそつてサッカーをしようと家を出ました。すると何やら見たこともない、家のようなやぐらのようなものをつくっているところに出くわしました。そこは、いつも通っている工務店の前。今日は作業場で大きなものがつくられています。

「これ、なんやろう。」

直人は少し気になりましたが、友だちの家に急ぎました。

次の日、また、それはありました。きのうよりも、柱と柱の間に多くの木が通っています。

「なんか、だんだんとじょうぶになっていきよる。いつたいなんやろう。」

そう思ったときです。

「ぼく、これがなんかわかるかね。」

つくっていた大工さんが声をかけてきました。直人はびつくりしましたが、

「わかりません。」と言うのがせいっぱいでした。

「あした、また見にこんね。そしたらわかるよ。」

大工さんはそう言つてまた仕事を続けました。

直人は、今日は学校の帰りに見に行くつもりです。気になってしかたありませんでした。工務店の前に来ると、

「あつ、山かさだ。おいちゃん、これ山かさやろ。」

「やつとわかつたね。これは、今年の山寺の山かさよ。」

まだ、かきぼうはついていませんでしたが、木でできた大きな車りんが四つ取りつけられていました。山かさは、直人の大好きな祭りです。それまで、直人が知っているのは、人形や電きゅうできれいかざられた山かさでした。でも、直人の心は、この土台を見



ただけで、わくわくしました。

「おいちゃんは、山かきの土台を作る人なん。これからどうやってかぎっていくと。」  
直人は一気にたくさんのことをたずねました。

「おいちゃんの仕事は、大工さん。でも、山かきも作るんよ。八幡の町には山かきがたくさんあるやろ。だから山寺だけじゃなく、他の町の山かきも作るんよ。黒崎の八木の山かきのうち六きは、おいちゃんが作った。それと、前田、相生町あいおいも作ったよ。」

「どうやって作ると、と言われてもむずかしいね。ただ、昔からつづけた作り方があるんよ。それは、土台を作るときはくぎを使わんのよ。」

「ここを見てん。柱のはしつこがつきぬけとるやろ。そして、ぬけんごとせんをしとるやろ。これを『こみせん』って言うんよ。」  
「えっ、これくぎを使わんでつくとか、すごい。」

直人は、昔から続く作り方を今もしていることに、とてもおどろきました。

直人は、今まで好きだった山かきのことをあまり知らなかったことに気がきました。それから、お父さんやおじいちゃんに、山かきのことをいろいろと聞いて調べました。どんなふうにして作られるのか、山かきができるまでのさまざまな行事やきまりことなど、たくさんのことを聞きました。

山かきは、四百年前から始まっていることや、戦争のときにはできなかつたこと。そして、一番おどろいたのは、かぎりのついた山かきよりも、杉すぎや笹ささの葉でかぎった笹山かきが、福岡県無形文化財になっているということでした。そして、山かきを作っているのは内八重うちばえさんという大工さんで、山かきを作ることでも有名な人ということも聞きました。内八重さんは、もう六十一才だけれども、山笠を二十五台くらい作っているそうです。

「お父さん、ぼくもかぎらずに取りにつれて行って。ぼくも山かきを作るの手つだいたい。」

直人は、お父さんにたのみました。

「だめ、だめ。何人もの大人が力を合わせてかずらを取るんやけ、子どもがおつたらあぶない。直人は、山かきの小屋でほかのこと手伝いよけ。」

お父さんに、きつぱりと、ことわられました。

かずら取りの日、直人は山小屋で町内の人といっしょに、新しくでき上がった山かきの台を見ました。

「ぼくつ、今日は手伝いにきたんね。」

内八重さんが声をかけてきました。

「うん、ぼくも昔から続く祭りをちよつとずつおぼえなくなったから。」

直人は、はずかしそうに答えました。

「そうね、がんばっておぼえなね。これからみんながとってきたかずらで、かきぼうを台にしばりつけるぞ。そして、笹山を作る。笹山が終わったら、いよいよかざり山に変身よ。かざり方はね、この台に、柱を四本立てて高くする。前と後ろの両横にやり出しを着けて横に広くする。それに飾りをつけて、人形で物語の場面を作っていくんよ。でも、それは人形師の仕事。おいちゃんが作った台がないとできんことやね。」

「ふうん。でも、山かきがかざられたらこの台は、見えんごとなるね。」

直人は、少し残念そうに言いました。

「いいや、山かきがいさましく町内をねり歩いとつたら、おいちゃんの作った台がすっかりしとることが分かるやろ。中に人が乗って太鼓をたたいて、たくさんのかざりをつけて、じょうぶに安全に山かき動くことが、おいちゃんはうれしいね。」

おいちゃんは、自信たっぷりに話してくれました。

直人は、自分が作るのを手つだった山かき動く様子をそうぞうすると、山かき待ちどおしくてたまりませんでした。



## 13 郷土が生んだマラソンランナー・君原健二

これは、メキシコオリンピックで銀メダリストにかがやいた、マラソンランナーの君原健二さんのお話です。

君原さんは、昭和十六年に北九州市に生まれ、マラソンランナーとして、オリンピックに三回出場しました。東京オリンピック八位、メキシコオリンピック銀メダル、ミュンヘンオリンピック五位、というかがやかしい成績をおさめています。

その他、選手時代に出場したフルマラソンは三十五回、そのうち優勝を十三回もしています。そして、すべてのマラソンを完走するという、すばらしい記録をもっています。

四十二・一九五キロメートルのマラソン。走っていると、いつも苦しい。いつもつらい。走りながら、「もうやめようか。」と弱気になったことも何百回あったか、分からない。それでも、一步一步血をかく思いでがんばる。

「がまんしろ!」「今まで続けてきたんじゃないか。」と心の中でさげふ。そんなときには、あと五キロメートルあつたとしても、あと五キロメートルとは、考えないで、せめて、あと一キロメートルだけ走ろうと考える。それもむりなときには、百メートル先の電柱まで走ろうと考える。そこまで行ったら、百メートル先のあの家のところまで走ろうとがんばる。こうして、一步走れば、一步ゴールに近づいたんだと自分をなぐさめながら走る。こんなときは、距離が二倍三倍にも思える。なんと長い長い道であろう。ギョツと心臓がちぢんで死ぬのではないかと思ったりする。だれが、こんなスポーツを考え出したのかと、だれかをにくんだり、なぜこんなにならねばならないのかと自分が見じめになったりする。そのうち、



やつとのことでゴールが見えてくる。

「やったぞ！」ここまでくればあとは、最後の力をふりしぼってゴールへと突進するだけだ。

わたしは、四十二・一九五キロメートルのマラソンを、ほとんど、そんな思いで走り続けた。

松並木がある近くの大学（戸畑区の九州工業大学）のグラウンドで、わたしは、よく練習した。そこには、大きな古いアーチ型の時計台があり、わたしは、それを横に見ながら一人で走った。夕暮れどきに、一人で走っているととてもさびしい。「何のために走っているのだろう。」「こんなばかばかしいことは、やめてしまおうか。」

と、何度も何度も考えてしまう。そんなとき、もう一つ別の心が、それを追っばらう。その後は、またがむしやらに走り続ける。いつもいつも、この繰り返りである。

マラソンで歩んできたわたしの人生を振り返ると、いつも心の中の「やじろべえ」が、右に傾いたり、左に傾いたりしていたように思う。

でも、「走り続ける」ことを通して、わたしは、人生を歩む上で大きく成長したように思う。勝つこととは別に、「走り続ける」ことで、すばらしいものを見つけたように思う。

私を育ててくれた町、戸畑。小学校・中学校・高校の約三十年間、マラソンを通して青春時代を送ったこの町が、一番好きだ。あのグラウンドの松並木は、あの頃と同じ。夕陽に染まって今も美しい。

本資料は、「素晴らしいものを見つけた」メキシコオリンピックマラソン銀メダリスト 君原健二（福岡県教育委員会 道徳実践活動資料「心をひらく」）と朝日新聞の夕刊記事等を参考に作成したものである。





## 16 アユがもどってきた

「おじいちゃん、今日ね、紫川あざがわにいつぱい魚が泳いでいたよ。」

近くの学校に通う正夫まさおが、うれしそうにおじいちゃんに言った。

「そうか、放流祭のアユも大きくなったんじゃない？」

「ほうりゆうさい？」

「うん、それはね…。」

おじいちゃんは、ゆつくりと話し始めました。

今町校区では、毎年四月になると「紫川アユ放流祭」が行われます。そして、今年は二十五回目を迎むかえます。

「紫川は わたし（ぼく）たちの ふるさとの川です。」

紫川にすむアユは 紫川のシンボルです。

紫川を アユなどの生きものたちと親しめる川にしたいと思います。

アユの産卵をやさしく見守り自然の生きものと人間との共存 共生をさぐる 川にしたいと思います。

そのために わたし（ぼく）たちは環境美化のために ごみ拾いや掃除をしています。

これからもごみのポイ捨てはしません。

環境美化のために努力します。

マナーを守り みんなで力を合わせてきれいな紫川を守り 育てていきます。」

これは「紫川アユ放流祭」で、今町小学校の子ども達が述べたM―CAP宣言です。

M-CAPとは、「む(M)らさきがわーカ(C)ムバック あ(A)ゆブ(P)ロ  
ジエクト」という意味です。

正夫は、どうしてM-CAPができたのかよく分かりませんでした。  
でも、おじいちゃんの話でようやくなぞが解けました。

今から三十年近くも前の話です。

この紫川は、かつては大変汚れた川でした。川の水はにがり、いたるところに白い泡  
が立ち、たくさんのごみが浮かんでいました。通りすがりの人たちも顔をそむけるほ  
ど、とても生きものが住めそうにない川だったのです。

えさを探しにやってくる鳥はいたものの、えさが見つからずじつとしていることもた  
びたびです。

そんな紫川を見て、たくさんの人が心を痛めていました。

そして、紫川をきれいにしたい。多くの生き物が住む川にしたい。そんな思いをもつ  
人が一人から二人、そして三人としだいに増え始め、ついに、地域や色々なボランティア団体、役所の人々が立ち上がりました。

地域やボランティアの人たちは、毎日のように川のごみを拾い、役所の人には川に汚れた水が入らないようにしました。

この紫川をきれいにしようとする活動は、さらに広がっていき、保護者、子ども達、学校の先生、校区に住む多くの人々が紫川を  
きれいにしようと呼びかけを始めた。

そして、紫川が少しずつきれいになり、数万匹びきのアユが放流されました。

しばらくして、大きくなったアユが泳いでいるのが見つけられました。



「やった。川がきれいになっていくぞ。」

みんなが大喜びしたのは言うまでもありません。

それだけではありません。放流した三万匹のアユとは別に、天然のアユ二万匹も海からやってきたことが分かったのです。

今では、毎年一万匹以上のアユが放流され、川の清掃も続いています。近くの小学校や中学校の子ども達、外国のボランティアの方も参加するようになりました。

春には、「菜の花ウォーク」、夏には、「川辺のキャンプ」、秋には、「親子ハゼ釣り大会」などが催され、市民センターを中心に「生き物調べ」といった川に親しむ行事も開催されています。

どの行事にも大勢の人々が参加し、かつての汚れた紫川がうそのように、人々に愛され親しまれる川となったのです。

MICAPの中心となって活動してきた会長さんは、「今年で二十五年目になります。川の水が多く近寄れない時に、ホースでアユを放流したこともあります。あんなに汚れていた紫川も今ではきれいになりました。」

私たちは、子ども達が、この校区に住んでよかったと思えるようにしたい。自分達の住む町の川を誇りに思えるようにしたい。子どものためのふるさとを作りたいのです。

先日、大学生になる子どもから『北九州から遠く離れ、いろんな川を見るたびに、紫川が懐かしく思い出されます。』という声をもらいました。とてもうれしかったですよ。」

と熱く語りました。



そこまで話すと、おじいちゃんはゆつくりと息を吐はきました。

正夫は、大人の人たちがこんな思いで紫川を大事にしているとは思ってもみませんでした。

「おじいちゃん、ぼくも明日、紫川の清掃にいくよ。」

はずんだ声でそう言うと、きつそく正夫は着替えの準備を始めました。

※ 資料・写真の提供は、「紫川を愛する会」世話人 崎野 始 氏

「MICA P」 会長 福丸清生 氏

「今町市民センター」 館長 山本敏明 氏

「北九州青年会議所」

「今町小学校」

ご協力によるもの



# 18 ミスター・トルネード

藤田 哲也

地震の強さを表す単位は「M（マグニチュード）」であることはよく知られています。同じように、竜巻の強さは「F」で表されることも世界中で知られています。残念なことに日本ではあまり知られていないようです。竜巻の単位の「F（フジタ）」は、実は、日本人の名前から付けられています。気象学者、藤田哲也のFなのです。

藤田さんは、一九二〇年、現在の北九州空港の南約一キロにある静かな村、中曾根で生まれました。幼い頃、父に連れられて貫山や周防灘の干潟で遊んでいました。満潮の時には海水が押し寄せ、潮が引くと、広大な干潟が出来るので、父と干潟を渡り二キロ沖の間島まで行きました。やがて満ちてくると小走りに細長い砂丘を通って戻ってきます。そんな時、「潮の満ち引きは、月と太陽の引力で起こるんだよ。」

という父の言葉から、引力とはすごい力だと感心しました。その頃から天文学に興味をもち、月の形の変化を調べたり、望遠鏡を作って太陽の黒点のスケッチをしたりしていました。

一九五三年、藤田さんはシカゴ大学に招かれてアメリカに渡りました。アメリカは、毎年約千個もの竜巻が起こり、その数は全世界の約七十五%に当たる圧倒的な竜巻発生国です。アメリカでは竜巻をトルネードと言い、アンテナを倒す程度の弱いものもあれば、大型車を軽々と持ち上げ、くるくる回転させながら放り出すような大変強いものもあります。そのため、人々は竜巻を大変恐れています。

しかし、当時は、竜巻が発生する数を数えるだけで、強さは予想されていませんでした。それどこ



町を襲う竜巻



藤田 哲也

るか、竜巻の仕組みがまだはつきりと解明できていなかったのです。

「竜巻の仕組みさえわかれば、備え方もわかり、被害が少なくなるかもしれない。だれも解明できていない竜巻を、私が解明してみよう。」

そう考えた藤田さんは、竜巻の研究に没頭しました。竜巻を発生させる装置を作り、実験しました。また、持ち前の行動力と分析力を発揮して、竜巻が発生すると直ぐにセスナ機に乗って竜巻を追跡しました。竜巻に近づいて何枚も写真を撮り、風と気圧の変化を調査しました。竜巻に近づくのですから、大変危険です。それでも、何度も何度も竜巻が来るたびに追跡したのでした。

「竜巻の中はどうなっているのだろう。竜巻の上から見たら中の仕組みがわかるかもしれない。」

新たな疑問がわいてきました。それは、途方もない実験でした。竜巻の上空を飛行機で飛び、上から竜巻の中をのぞいて見るというのです。だれも想像しないような実験でした。

「本当にそんなことができるのだろうか。でも、竜巻の仕組みを解明しなければ…。」

藤田さんは、決心して竜巻の上空を飛んだのです。そして、とうとう竜巻を発生させる「親雲」の存在を解明したのでした。

「大竜巻の中には子竜巻がかくれている、メリーゴーランドのようにくるくる回っている。」と世間に発表しました。すると、

「子竜巻を見た人は一人もいない。子竜巻なんて藤田の夢じゃないか。」

と、次々に反論されました。抗議の電話もかかりました。

「もつともつと竜巻のことを調べて、子竜巻を証明しなければ…。」

歯をくいしばって竜巻を見つめました。



竜巻発生装置で実験する藤田さん

「子竜巻の存在を証明さえすれば、発生の予報ができるかもしれない。」

しかし、もう一息というところに証明できるものが見つかりませんでした。そんな藤田さんのもとに、一枚の写真が送られてきました。子持ちの大竜巻の写真でした。その写真は、見事に藤田さんの予測を証明してくれました。

「やったぞ、これで子竜巻を証明できるぞ。」

子竜巻の存在が証明されたことよって、竜巻の備え方がこれまでと違ったものになり、正しく備えることができるようになりました。そして、竜巻による被害を減らすことにつながったのです。

藤田さんは、竜巻の仕組みを調べながら、被害状況も細かく分析していました。強い竜巻もあれば弱い竜巻もあり、それぞれの被害の様子を細かく記録していました。そして、被害データなどから竜巻の強さを表すF（フジタ）スケールを考案したのです。それは、竜巻の強度をF〇からF一二の二三段階に分けて示したもので、今では世界標準の単位として、広く世界中で用いられています。

竜巻研究に大きく貢献し、人々の不安や被害を少なくすることに成功した藤田さんは、その後も研究を続け、ダウンバーストという下降気流を発見しました。このことよって墜落事故をふせぎ、多くの人命を救うことになりました。ダウンバーストを探知するためのドップラーレーダーが世界中の空港に設置されています。

藤田さんは、科学者としてベールに包まれた真理を追究する姿勢を絶えずもち続けていました。それは同時に、明日の人類の幸福のためであると考えていたのではないのでしょうか。

（藤田記念会より一部写真提供）



空港に設置している  
ドップラーレーダー

## 20 折尾神楽と出会う かぐら

きょうは、七月末の土曜日。折尾西公園で「夏越祭」がある日だ。ぼくが小学校に入学してから五年間、お父さんは家族みんなを連れて夏越祭へ足を運ぶ。だからこの日は、友達と遊ぶ約束をすることができない。ぼくは毎年しぶしぶついて行っている。

「お父さん、どうして毎年家族で夏越祭に来るの。葉っぱのトンネルをくぐるのは、何かのおまじないなの。」

これまでぼくが疑問に思っていたことをお父さんに聞いてみた。お父さんはにこつと笑って、「あのトンネルは、茅の輪ちと言うんだ。茅の輪をくぐると、人の心にひそむ悪い心や、病気、悪霊りまなどを、はらいのけてくれると言いい伝えられているんだよ。」

と、教えてくれた。

だから、みんなはあのチクチクする葉っぱの茅の輪を毎年くぐっていたんだと納得なっとくした。去年までは八の字を描き、茅の輪くぐりを何も考えずに三回していたが、お父さんの話を聞いて、今年は気持ちを込めて輪くぐりをする事ができた。

茅の輪くぐりを終えると、ステージでは神楽が始まる。折尾神楽保存会の人たちをはじめ保育所の子どもたちなどいろいろな地域の人たちが神楽を演じ始めた。子どもたちまで一生懸命に練習してきているのだな、と感心しながら演じられる神楽を少し見てから家に帰った。

九月になると、学校の総合的な学習の時間では、「地域のよさやじまん」について調べる学習をすることになった。ぼくの住んでいる地域のじまは、毎朝登校してくるときに小中学生の交通安全を見守ってくださいと書いてあるおじいさんやおばあさんがいてくださること



茅の輪くぐりの様子



だと思う。そこで、見守ってくださいるおじいさんにお礼を言った後、「地域のよさやじまん」はどんなものがあるのか、さらにインタビューをしてみた。

すると、市民センターの館長さんは、

「この北九州市のじまんとしては、国が指定している重要無形民俗文化財（みんぞく）の戸畑祇園大山笠（ぎおんおおやまがさ）や黒崎祇園山笠などたくさん伝統的な文化を大切に受け継いでいることでしょうね。折尾独自のじまんとして、一九七〇年ごろから折尾に新しい伝統としてつくろうとしている折尾神楽も挙げたいと思います。」と、話してくださいました。

折尾神楽といえ、毎年夏越祭でぼくも何度も見たことがあった。館長さんの「新しい伝統」という言葉が少しひっかかった。あの折尾神楽は折尾にずっと昔からあったわけではないということと、「新しい伝統を」ということについてもつと話を聞きたくなった。館

長さんに折尾神楽保存会の会長さんの連絡先（れんらく）を教えてくださいだき、日曜日にお父さんに車でそこまで連れて行ってもらった。

神楽で使う道具や衣装（いしやう）がたくさん並べられている部屋で、折尾神楽保存会の会長さんにインタビューしてみた。

「今、地域のよさやじまんについて学校で勉強しています。会長さんは、どうして新しく折尾神楽を折尾ではじめられたのですか。」会長さんは、いすに腰かけてゆつくりとやさしくお話をはじめた。

「この折尾神楽は、私の生まれ故郷の島根県に四百年ほどの歴史をもつ『石見神楽』（いわみ）をもとにつくったものです。本来は、夜から朝まで三十三番舞い続けるのですが、北九州では五番だけ二時間程度にまとめて舞っています。北九州の人たちに神楽のよさを理解してもらったためにテンポよく舞ができるように少し工夫をしました。私の大切に行っている神楽をぜひ北九州の人たちにも分かっほしいし、四百年の歴史をもつ神楽をここ北九州の折尾にいつまでも残したいと思ったからです。」

会長さんは、真剣な表情をしてお話を続けた。



神楽を舞う様子

「私の父は、住んでいる村の村会議員を任されるほど地域の人たちから信頼され尊敬されていました。また、地域の人を本当に大切にしていました。そんな父にあこがれ、父のようになりたいという思いがとても大きかったですね。父は農業を営み村会議員をしながら神楽を舞っていました。四百年の歴史を受け継ぐその姿はとても真剣で厳しくもありましたが、大変格好良かったです。そんな父をわたしは心から尊敬しています。実家では兄が、父の神楽を受け継ぎましたが、わたしも尊敬する父の後をどうしても継ぎたいと思ったのです。」

会長さんの話を聞きながら、ぼくは、古くから伝わっている伝統や文化には、それらを受け継ぐ人の思いが力強く息づいていることを感じた。

会長さんのインタビューを終え、帰りの車の中からいつも見慣れた町並みが目に入ってきた。折尾の町もたくさんさんの文化や伝統を受け継いできているはずだ。この町に古くからある伝統や文化にどんな人たちのどんな思いが生き続けているのか、さらに知りたいという思いがこみ上げてきた。

(折尾神楽保存会より写真提供)



## 21 取りもどせ 青い空と海

北九州市八幡東区にある環境ミュージアム。環境に関する多くのことが展示されています。みなさんの中にも行ったことがある人がいるでしょう。

現在七十歳を超える角谷忠彦すみやただひこさんは、環境サポーターとしてボランティア活動をしています。環境サポーターというのは、ミュージアムに訪れる人たちに館内のことをわかりやすく説明する人たちのことです。また、小学校にも出かけていき、環境についてお話をしてくださることもあります。角谷さんは、環境カウンセラーとして、地球温暖化防止の活動にもかかわらずかかわっています。地球の自然を守るために、角谷さんは様々な活動に取り組んでいます。角谷さんが、今日このような自然を守るための活動に携たずわるようになったのには、実はこんなわけがあるのです。角谷さんから聞いたお話です。

今から四十年前みなさんの住んでいるこの北九州市は、工場から出る煙や汚水で空や海は、とてもひどく汚よごれていました。洗濯物せんたくものをほすと、煤煙ばいえんで逆に汚れてしまうという始末です。窓を閉めても工場からの煤煙が家の中に入ってきます。煙突からは、黄色や黒、赤などの煙がでていて、たくさんの人たちが、目や気管支を悪くしてしまいました。数年前、光化学スモッグで運動会が中止になったように、今から四十年前は、毎日が煤煙との戦いでした。海も同様でした。洞海湾どうかいわんは、「死の海」と呼ばれるほどヘドロがたまり、魚は一匹いっぴきも住めなくなりました。悪臭がただよう、それはそれは、みるもむざんな姿になっていました。



このような状況から北九州市をもとの姿に復活させるため、市民・市役所・企業が協力して、もとの青い空や魚の住める洞海湾を取り戻す取組を始めました。

私は、そのころ製鉄所の近くの化学工場で働いていました。私は、その工場の公害防止管理者として水質管理の仕事をするようになりました。公害防止管理者として働くためには、試験を受けて資格を取らなければなりません。昼間、仕事をして帰宅した後、そのための勉強をしなければなりません。仕事をした後勉強するというのは、大変きついものです。つい、うとうととして寝てしまうこともありました。きつさのあまり、もうやめてしまおうかなと思うこともありました。しかし、毎日北九州市の人たちが公害で苦しんでいる様子を見ると、自分でできる何かにかかわりたいという思いで、また眠い目を開き勉強に取り組みました。そして、資格を取り洞海湾の水質管理に携わることになりました。

主な仕事の一つは、これ以上洞海湾の水質が汚れないように毎日検査して管理するものです。たくさんの工場から流れ出る水質を検査する仕事は、思った以上に大変なものでした。夏の暑い日は、ものすごい臭いです。雨がふれば、濁りもひどく洞海湾から水を汲み上げるのも大変です。さらに、自分としては一生懸命がんばっているつもりでも、公害で苦しんでいる付近の住民からは、

「早く何とかしてくれ。」

と、苦情がくることもありました。私も北九州市民の一人です。公害で苦しんでいるのは私だって同じ立場です。

「こんなに一生懸命しているのに。なぜわかってくれないんだ。」と、思う気持ちにもなりました。また、工場の中でも利益を出さなくてはならないために、なかなか私の話に耳を傾けようとしてくれない人もいました。このようにたくさんの苦勞があり、やめてしまいたくなることもありました。他の部署に自分で配属願いを出してしまおうかと思



うこともありました。しかし目の前の汚れた洞海湾を見るにつけ、この北九州市になんとかして青い空やきれいな海を取りもどしたいという思いが、やめてしまおうという思いをかき消してくれました。また、自分の子どもたちだけでなく、この北九州市の未来に住む子どもたちのためにも、青い空と海を取りもどしたいという思いが強くこみ上げてきました。

もともとは、北九州市の海や空は、とてもきれいでした。工場の排水で汚染されるまでは、洞海湾はたくさん魚が泳いでいたのです。「あの頃のような空と海を取り戻したい。」そういう思いで私は仕事に励みました。こうして他の部署に転属されるまでの、昭和五十年から五十五年の五年間この仕事を続けることができました。市民・市役所・企業のような努力が実り、北九州市の町は、青い空と魚の住める海を取りもどすことができました。

角谷さんは、今、次のような思いをもっているらしいです。

「永年勤めた工場を退職してから、私は、こうやって環境にかかわるボランティアの活動をしています。今、北九州市の空や洞海湾を見るにつけ、あの時、仕事をあきらめずに続けてよかったなという思いでいっぱいになります。あのころ私を取り組んだ仕事は、本当に小さなことかもしれませんが。私のように自分にできる小さなことを多くの人が一生懸命取り組んだことで、今日、北九州市に青い空と海をとりもどしたのです。私はこれからもこの北九州市の町を、そして、この地球の青い空と海を守るために、自分にできることをしていくつもりです。」



## 22 焚き火に情熱を注いだ一人の僧

門司の青浜あおはまに灯台が作られる前の話です。

北九州市の門司区は関門海峡を挟んで下関市と向かい合っています。その北々東にある白野江しろのえの沖は、船の遭難が絶えない地域として知られており、昔は魔の海などと呼ばれていました。

一八三六年の秋、この日も大分県国東くにさきから周防灘すおうなだを北に航行している一隻の船がここを通りかかりました。その船は風を帆いっぱいを受けて、途中、荻田かんだの浦に寄港して下関に向かっています。その船がこの沖に差しかかると船中は奇妙な光景に様変わりしました。乗客の話し声かびたりと止み、人々は懐や袖そでの中から数珠じゆずを取り出し始めました。みな数珠を持つて両手を合わせ、仏様に無事の航行をお願いするため念仏を唱え始めました。また、船乗りたちも緊張した表情と動作を見せ、船中は張りつめた雰囲気に変りました。その奇妙な光景を不思議そうに高野山こうやさんに向かう途中の一人の修行僧が見ていました。

「船頭さん、魔の海じゃということとは分かりましたがのう、なぜに魔の海なんじゃな。狐が出てきよつてまさか、船の皆の衆を化かすからじゃなからうに。」と僧が尋ねると船頭はこう答えました。

「波の下には、瀬が隠れておるんや。ごつつい岩が牙きばをむいて海の底にひそんでいますのや。周りが薄暗くなると、あの岬もぼんやりとかすんできますじゃ。目測を誤ると。そいつの所に近寄りすぎて、牙にとどめを刺されますんじゃよ。」

魔の海として恐れられている海域は、関門海峡・瀬戸内・周防の三つの海の潮流がぶつかり合う難所です。それに加えて海底は岩礁いさかの起伏が激しく、潮流もその流れる方向と速度が複雑さを増していました。そのため、難破する船が多かったのです。

「高野山行きは止めじゃ。金剛山こんがうざんで修行するのも止めじゃ。」

初老をとつくに過ぎた旅姿の僧が心の中でこうつぶやいたのは、白野江村の沖を航行中の船の上でした。

「わしの修行の場は、あの青浜の岬と決めただ。今日からわしの務めは、この魔の海をみ仏の海に変えることじゃ。」  
ふたたびつぶやいた一人の僧は、船頭に船を入り江に近づけるよう頼みました。船頭が訳を尋ねると、

「あの岬がわしを呼んでいるんじゃないよ。残る人生とわしの肉体と魂のすべてをあの岬で終えたいと強く思うてな。」と答えました。

この僧は、名を清虚せいきよと名乗りました。清虚はこれからの生き方を船頭に話し、船を青浜の入り江に回してもらいました。すぐに上陸し、住まいを見つげるために青浜の海を岬から見て回りました。

青浜の入り江近くには十軒ほどの小さな村がありました。旅姿の僧はその村の一軒を訪ね、小さな田畑のある夫婦に迎え入れてもらいました。温かなぬくもりの感じられる夫婦に、僧は目を閉じて自分の身の上を話し始めました。

「僧衣をまとう前は、太平衛たいへいゑといい大工をしておりましたわい。あれは、わしが十七歳のときじゃったな。幼なじみと相撲をとっていた時に、力あまつてその友を死なせてしまうんじゃないや。悪意がなかったという事で何もおとがめはなかったんじゃないやが、亡き友の菩提ぼだいを高野山で弔とむらい続けることが自らの生き方でなければならぬと思ひ、僧になりましたのじゃ。本来なら友の弔いに山へ行き灯明の炎を灯すべきじゃが、この地から魔海を航行せねばならぬ船に送る人助けの明かりになることこそ弔いにしようと心に決め上陸したのじゃ。」

彼は、若くして大工で身を立てることができるといふほどの名人になっていました。しかし、亡き友のために一生合掌がっしやうして読経どきやうし、祈り続けることが自分の最善の生き方だと悟り、僧となる決意をしたのです。心と体のどこにも邪念がなくて常に清くありたい。また、欲は常に無（虚）であるべしと。その思ひから彼は清虚を名乗ったと考えられています。

「で、坊主ぼんず、火焚きを？それでどうなさるのじゃ？」

「何としてでも、日暮れから明け方まで岬の上で焚き火を続け、夜の海を航行する船の道標となる明かりを送ろうと思ひおりますのじゃ。」

さつそく清虚は、岬で夜間に航行する船の道標となることの許可を藩に働きかけてもらうため、庄屋に熱心に訴えかけました。清虚の熱意に、庄屋をはじめとする地元の人衆は、すぐにでも焚き火の許可がおりるよう応援しました。しかし、当の小倉藩は慎重

な姿勢をくずしませんでした。清虚は他藩出身の単なる旅僧であるがゆえに、信用されるまでに時間がかかったのです。苦悩する清虚を見かねて庄屋は、清虚に直接訴えさせようと動きました。

清虚は山奉行に、

「自分は藩からの財政上の援助をあてにして、この仕事をしようという気持ちは毛頭ない。そのような気持ちはみ仏の教えの道に反するものだ。」

と、訴えました。

清虚の誠意と熱意が、小倉藩十五万石の小笠原藩主の心を動かしました。焚き火を始めることができたのは上陸から一年後のことでした。

何とか藩に認められ、焚火場と清虚が寝起きすることのできるだけの狭い灯籠場が完成しました。数々の村人たちの支援に感謝し、彼はこう言いました。

「わしの老後の生き方がこれで決まりましたぞ。いまだ修道は未熟じゃが、み仏のお心を体現するに焚火役を全うすべき灯籠場の主じゃ。」

こうして、たった独りつきりで岬の灯籠場に寝起きして、たとえ一夜といえども、焚火の明かりを絶やすことのない十三年間が始まりました。

清虚の生活はこうでした。まずは一晩中火を灯すために必要な薪を大量に確保しなければなりません。しかし藩から支給されていた支援金をすべて薪代にしても足りないため、お粥を一日一回だけの食事とし、時間を惜しんでは流木を拾い集めました。また僧としての修行を兼ねて、周辺の村々へ托鉢に回りました。托鉢で得たお金も全て薪代にあてました。村人たちは、彼のことを単なる焚き火を続ける坊主、けちで一食しか食べない坊主とあざけていましたが、清虚の人となりにふれるうち、人々の見方も変わっていき、尊敬の念を強めていきました。村人の中には、托鉢に協力するだけでなく、子どもに『ご苦労様』と言って頭を下げさせ、差し入れるよう教える者も多くなっていきました。また、食事や身の回りの支援を申し出る者もでてきました。その努力が評判となっ



て、小倉藩だけでなく、下関の商人たちにも伝わっていきました。中には、薪代、油代の支援、白米の支援をした商人がいました。焚き火でみ仏にお手伝いするという一念で始めた奇特な行為は、近隣の村人や商人たちの善意を引き出したのです。また、清虚の心と仕事を引き継ぎたいという一心で焚き火を手伝い始めた農民（利三郎）もでてきました。

一八五〇年、灯明を送り続けて一三年、友の死という悲劇を機に自らの生き方を変え、さらに、この地で再び生き方を自ら変え、焚き火にいのちを賭けた人生を送り、清虚は、その一生を終えました。七十四歳でした。清虚の遺骨は今なお青浜の地に眠っています。彼の墓石の三つの面は瀬戸内海（目指していた高野山方向）と周防灘（二度と帰ることのできなかつた故郷）、関門海峡（今でも海を見守ることができるところ）の方角に向いています。

彼が亡くなったあとも、ここから暗夜の海上を航行する船への灯明は消えませんでした。村人は利三郎を支援することが自分たちの誇りであるという意識が高まり、商人や藩も援助を惜しみませんでした。その思いが引き継がれ、二〇年後に時の明治政府による灯台建設が始まったのです。

※注・托鉢 修行僧が鉢を持って家をまわり、お経を唱えてお金や食べ物ほどこしを得ること。

○ 「石原宗祐・僧清虚・岩松助左衛門（ふくおか人物誌2）」 田郷利雄 著 西日本新聞社刊 を再構成したもの



北九州市門司区 へさき 部崎に立つ清虚の像

## 23 アナタに会いたい ～「いぬのおまわりさん」(大石真由美)～

がんと闘いながら次女を産み、約四カ月後に二十四歳で亡くなった北九州市門司区の大石真由美さんは、闘病生活を携帯電話でブログに綴った。

「ママ、ビッグニュース！ 第二子妊娠にんしんした！」

真由美さんは興奮した様子で母に電話をかけた。真由美さんは三人きょうだいの真ん中で、姉とは年子としごである。「年子は楽しい。私も絶対女の子を年子で産みたい」と話していた。

真由美さんは〇七年五月に結婚、同年八月に長女瑠美るみなちゃんを出産した。心待ちにしていた結婚式を間近に控えた〇七年十二月、次女結南ゆうなちゃんの妊娠がわかった。

式の準備や健診で忙しくしていた〇八年二月、エコー検査で子宮の外側に影が見つかった。再検査の結果、血液のがんの一種である悪性リンパ腫しゅと判明した。医者に子どもをあきらめるよう勧められ、一日中泣き続けた真由美さんは、その日のブログにこう綴った。

〈赤ちゃんを諦めるとか、絶対にしたくない

だってこの妊娠がなかったらまゆは気づかなくて

多分生きてなかったと思う

この子が命がけでまゆにイノチの危険を教えてくれた

だからまゆは命がけで産みたかった〉

手術はせず、妊娠継続のまま抗がん治療を開始した。副作用による、もの凄い吐き気や発熱が真由美さんを襲い、髪が抜けるたびに泣いて母に電話した。一歳にもなっていないなかった増美南ちゃんの世話も出来ない。頑張っても頑張っても終わりの見えない毎日に、悔しさが募った。

〈何で病気は、まゆを選んだんかね

何で今なんかね

一生の中でどっかでガンにならないけんのなら

姫ちゃん（※おなかの赤ん坊）産んでからでもいいやん

何で今病気にさせたんかね

神様って、なんなんかね〉

六回の抗がん剤投与の副作用に加えて、息切れや動悸、不眠など体への負担は大きくなっていった。しかし、すすすすとおなかの中で成長する我が子の生きようとする力強い姿が励みになった。

〈病気になって失ったモノはたくさんある。

お金、結婚式、何より旦那や娘との時間、

成長が見れん、安らぎとか。

でも得たものもたくさんある。

家族や友達の大切さが分かった。一人やないって思えた。



旦那と娘がもつと愛しくなった。

普段出来る何気ないコトが

幸せなコトって

心から思えるようになった。く

六月二十三日、帝王切開で出産した。抗がん剤に耐え、次女結南ゆうなちゃんは元気に生まれてきた。真由美さんは、体がつかなくても車椅子に乗って毎日、NICU（新生児集中治療室）にいる我が子の顔を見に行つた。その時の真由美さんの顔はとても幸せそうだった。

〈初めて会う我が子は

とても可愛くて

頼りなくて

たくましくて

愛しくて

何にかえても守らないとって思った

ママとパパを選んでくれて

生まれてくれてありがとう

出産後すぐに抗がん剤投与が始まった。今までのものと違い、朝晩連続六日間投与と、真由美さんにとって身体的にも精神的にも辛いものとなった。しかし、抗がん剤治療の効果も乏しく、医師からは血液検査の結果が非常に悪く、命のことも考えなければなら

ないと告げられた。頭を殴られたような気がした。

その日、真由美さんは最後となるブログを記した。

〈大金持ちになりたいとかそんなんやないよ

ただ普通で お金なくても 家族一緒に おりたかっただけなんよ

(略)

るんちゃんごめんね

ママ、ずりばいもハイハイも

つかまり立ちも 歩けるようになったのも

その瞬間を知らんの

ゆうなちゃんごめんね

ママねほんとは母乳あげたかったんよ

ゆうなちゃんが おっぱい欲しがって

口パクパクさせる度にね 泣きたくなる

外泊する度にね

(子ども2人が) 大きくなって 別人みたいで

嬉しい反面 その成長を見れんのが

悔しいで仕方ない



最後のブログから約一週間後に臍帯血の移植を受けたが改善せず、ほぼ寝たきりの状態になった。十一月五日、真由美さんは家族に見守られ、長く辛い闘病生活を終え、天国へ旅立った。

真由美さんは待ち続けた我が子への気持ちをこう残していた。

〈赤ちゃんを守るために 早産防止の手術を受けた

その赤ちゃんを 今度はまゆの命を守るために 諦めてと言われた

決断できない決断を迫られた

親として〇才の娘を残して死ぬわけにもいかなかった

赤ちゃんを産んだ後 手遅れになって 産んで死ぬわけにもいかなかった

結婚する程好きな人と 別れたくもなかった

でも 親として 親の命のタメに

子どもの命を犠牲には したくなかった

だから両方とることにした

(略)

色んな人に言われた

赤ちゃんは アナタに病気を教えるためにお腹にきたって

まゆも思ったよ 赤ちゃんが教えてくれたって

でもね 違う

赤ちゃんは生まれて生きるタメにお腹にきた

だから命がけで教えてくれた赤ちゃんを命がけで産むって決めた

一緒に頑張った

元気に動いてくれて 何度も励まされた

ありがとう

何回言っても言い足りない

そんなアナタと もうすぐ会えるね

○ 「いぬのおまわりさん」 大石真由美著 不知火書房 を再構成したもの

○ ヒューマンドラマ特別企画・愛と感動のドキュメント「いぬのおまわりさん」

ホームページ参照



## 25 村を救ったお糸の物語

呼野よぶのは、小倉の中心から車で約三十分。その先の金辺きべトンネルをくぐれば田川に通じます。上呼野のバス停から五分ほど歩くと、土地の人から「お糸池（ひえごうの池）」と呼ばれる静かな堤つみに出ます。その堤のほぼ真ん中に、石碑がひっそりと立っています。表には「お糸の墓」と刻まれています。今から二百数十年前、この池の土手を築く難工事が行われた時、命を捧げたお糸をしのんで、後に呼野の人々が立てたものです。

「今年は稲がよく実ったのう。この堤のおかげじゃ。」

ひえごうの池の土手に立ったおたねとお糸の親子は、黄色く波打って広がる田んぼを眺めていました。堤は、ひえい川をせき止めたもので、村人たちが三年の月日をかけ、この春完成させました。堤ができて、初めて迎える取り入れの秋でした。谷あいの村、呼野の水源はこの小さなひえい川しかなかったため、これまで長い間、水不足に悩まされ続けてきました。

「これでもう水の心配はない。」

村人はだれもがそう思いました。

「今年の秋祭りはきつとにぎやかぞ。」

取り入れに励む村人の姿にも、喜びがあふれていました。ところが、この喜びも長くは続きませんでした。

次の年、田植えが終わって一息ついたところから、毎日毎日雨が降り続いたのです。水かさが増し、すごい勢いで流れるひえい川は、三年かけて築き上げたひえごうの池の土手を突き破ってしまいました。土手下に広がる田んぼや畑は一面の泥海に変わり、植えたばかりの苗はすっかり流されてしまいました。しかも、夏は日照り続き。苗を植え直した田んぼがわずかにありましたが、秋になっても実をつけることはありませんでした。

「このままでは、来年は田植えができませんぞ。」

「来年の秋には食うもんがなくなってしまうぞ。」



なんとしても、来年の田植えができるように土手を作り直さなければ——。村人総出の修理が始まりました。お糸も体の弱い母親を助け、大人にまじって働きました。工事は年を越しても続けられ、どうにか春が近づいたころには、破れた土手ももとの姿に戻り、田植えも無事に終えることができました。

お糸は八つのときに父親を病で失い、それから母親と二人暮らしです。田んぼや畑をもたないお糸の家では、父の死後、体の弱い母親が機を織って暮らしを立ててきました。お糸も暮らしを支えるため、近所の百姓家の田畑を手伝い、わずかな駄賃だちんをかせいできました。そんな貧しい暮らしをしているお糸でしたが、素直で気だてがよく、みんなにかわいがられていました。中でも、隣に住む元蔵げんぞうはいつも声をかけて励ましてくれました。元蔵とお糸は歳が近く、お糸は元蔵を兄のように慕っていました。元蔵の家は、広い田んぼや畑をもっており、田植えだ、野菜の取り入れだというと、いつもお糸を手伝いに呼んで、駄賃をはずんでくれました。

冬から春へ、春が終わって夏が来ました。念を入れて築き直した土手なので、もう大丈夫だと、みんなが信じていたひえごうの池。それなのに、その土手が夏の大雨でまた切れてしまったのです。

「こう何度も切れたのでは、暮らしはいつまでたつても楽にならんわ。」

村人は再び土手を直そうとする気力を失いかけていました。

この年も長雨が続き、気温の上がない夏でした。秋が来ても、田んぼに実るものは何一つありませんでした。それでも百姓は年貢を納めなければなりません。二年続きの災いに、どの家も食糧の蓄えは底をつき、いよいよ食べるものがないという状態でした。

「二度も繰り返した土手の工事、三度目は何が起ころやら。」

そう思いながらも、このままでは村が全滅してしまいます。食うや食わずの中、三度目の土手の工事が始まりました。

「せき止めてもせき止めても池の土手が切れるときには、人柱（水の神様へのいけにえに、人を生きたまま土に埋める）を立てて築けば、決して破れることはない。蒲生がもうの土手も人柱を立て、せき止めたそうだ。」

おたねは死んだ夫文次郎が話していたことを思い出して、さっそく庄屋に申し出ましたが、

「人柱だなんて、とんでもない。」

その庄屋の一言で、話はそのままだち消えになってしまいました。

やつとのことで、三度目の修復工事が終わりました。それから二年の間土手は破れず、村の暮らしも少しずつよくなっていきました。お糸も十四歳、村の若者の目をひくようになりました。そんなお糸に思いを寄せる元蔵。仲のよい二人を見て、

「お糸は元蔵の嫁になるんだ。」

と、村の人たちはうわさするようになりました。

「稲の育ちもいい。このまま無事に秋を迎えられたら——。」

村人はみんなそう願っていました。

そんな夏のある日。ぬけるような青い空が午後からくもり始め、一面真っ暗になり、ポツリポツリと大粒の雨が落ち始めました。稲妻が走り、雨がだんだん強くなっていきます。

「すごい雨になりそうだ。ひよつとしたら、また——。」

村人は不吉な予感を口にし始めました。雨は丸二日、休みなく降り続けました。

三日目の明け方でした。ジャンジャンと打ち鳴らされる早鐘はやがねが、村人の眠りを一気に覚まししました。村人が池に集まってきたころには、満水した池の水が土手にあふれて、滝のように流れ出していました。二年前に壊れた場所が、再び危険な状態になっています。

「土どのうだ、早く土のうでせき止めねば。」

土手の裂け目はどんどん広がっていきます。

「もうだめだ。山に逃げろ。」

とうとうひえごうの池の水は、狂ったようにどつと流れ出しました。小高い丘から、ぼう然と眺めていた村人の中に、お糸もまじっていました。



「こんなに何度も土手が切れるのは、村人の中にだれぞ神様の怒りがかつている者がいるのではなからうか。」

お糸はそう思うのでした。三日間雨は降り続けました。池の中には、上流から土砂がうずたかく流れ込んでいました。

「暮らしがやつとよくなりかけたと思つた矢先にこの始末。わしらはいつたいどうすればいいのじゃ。」

「築いても築いてもこんな始末。天は無情だのう。」

集まつてきた村人もこのありさまを見て、すっかり力を落としてしまいました。

「みな衆、どうするのじゃ。」

集まつてきた村人の顔を見ながら、庄屋が話を切り出しました。四度目の土手修理の相談です。

「何度やつても同じことですわい。わしらはこの苦しみから逃れることはできんのじゃ。そう思つてあきらめる他はない。」

「それじゃ、米作りはいつたいどうなるのじゃ。山の仕事だけでは暮らしが立つまい。」

賛成する者、反対する者、話はなかなかまとまりません。こうして何度も何度も寄り合いがもたれました。元蔵の父、源右衛門は

「わしら一代のためだけではないぞ。子や孫、そのまた子の代のことまで考えて、もういつペン土手の修理にかかろうじやないか。」

と、村人を一人一人説いて回りました。一時は投げやりになっていた村人たちも源右衛門の説得を受け入れ、もういつペンやつてみようという気持ちになりました。

こうして、堤の修理は四たび始まりました。村人は総出、それに川下の百姓衆も応援にかけつけてくれました。今度こそ絶対に切れぬ土手をと、土手作りで名高い棟梁とうりょうに工事監督を頼みました。お糸も毎日のように働きました。度重なる難工事に疲れ切った人たちの間では

「ひえごうの池にも、人柱を立てたらどうじゃろうか。」

という声が聞かれ始めました。

「だれが人柱に立つのじゃ。まさか、くじ引きをするわけにもいくまい。」

「たとえ田んぼがだめになつても、そんなことはできん。」

人柱を立てるといふことは、尊い一人の命を奪うことになります。けれども、一人の犠牲で村人全体が救われるのならと、度重なる災難に苦しんできた村人の心は揺れ動くのでした。そのうち、だれ言うともなく、

「この堤の仕事に出てくる者の中で、破れの繕つくろいに横布を当てている着物を着ている者、その人が人柱に立つということにしたらどうじゃろう。」

と声が出ました。

ある日のこと、

「腰巻きのすそのほころびに横布を当てた人がいる。」

だれがそれに気がついたのか、働いている村人の間に異様な空気が流れました。みんなの目が自分に注がれていることに気がついたお糸の顔色がさつと変わりました。両手で顔を隠したお糸は、その場から一目散に逃げ出しました。村人は声もなく、じつとお糸の後ろ姿を目で追いました。その中に、真つ青な顔をして立ちすくんでいる元蔵の姿がありました。

家へ着くなりお糸はバツタリと倒れてしまいました。おたねがびっくりして

「どうした、どうしたえ……」

と抱き起こしました。真つ青な顔のお糸は、何も言えずにおたねの顔を見つめています。やがて、見開かれたお糸の目からぼたぼたと大粒の涙がほほを伝いました。

「かあさん、許して……このお糸が人柱に……」

「なに、なに、今何と言った——。」

驚いたおたねは声も出ません。母親にすがりながら、お糸は工事場で起こったことを話しました。

「そりゃうそじゃ、うそじゃろう。どうしてお前が人柱にならねばならぬのじゃ。これが本当なら、お糸、わしはこれから何を頼りに生きていけばよいのじゃ。苦勞してここまでお前を育てたのに——。」

夕暮れがせまり、部屋の中も薄暗くなってきました。母親の顔をじつと見つめていたお糸が、



「かあさん、人は生まれたからにはどうせ一度は死ぬ身じゃ。何か世の人のために残していくことが大事だと、死んだとうさんが言っていたではないか。わたし一人の命で村人全体が救えるのなら、死んで、ひえごうの池を守るんじや。」  
そう言い切るお糸の顔は、もう固く決心しているようでした。

数日後、白装束しろしょうぞくに身を包んだお糸を乗せたみこしが、堤の土手に着きました。後には別れを惜しむ村人の長い列が続いています。みこしをかついだ若い衆の中に、やつれ果てた元蔵の姿もありました。お坊さんの読経と村人たちの唱える念仏が、谷間の村に響きました。やがて、お糸のひつぎが、土手の奥深くに置かれました。村人たちは涙を流しながら土をかけていきました。

一人取り残されたおたねは、  
「お糸！お糸！」

と泣き続けました。西の空があかね色に輝く三日目の夕方、泣き疲れたおたねの目に、夕焼け雲に浮かぶ仏様の姿が見えました。

「あつ、お糸が、お糸がお地藏様に、お糸地藏様に！」

土手の工事は夜を日について進められました。土手の礎石そせきとなったお糸に報いるため、村人は必死に働き、間もなく土手の工事は完成しました。

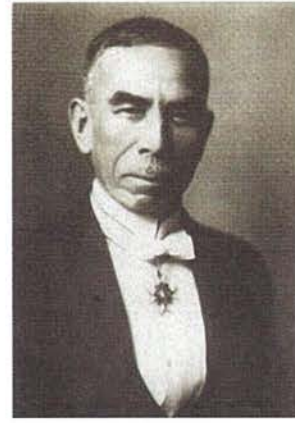
それから約三百年、お糸が守り続ける「お糸池（ひえごうの池）」の土手はもう切れることはありません。そして、今もきれいな水をたたえ、呼野の田んぼや畑をうるおし続けています。おたねがお糸を呼び続けた小高い丘は「呼ぶ岩」と名づけられ、池を見守るようにたたずんでいます。毎年八月二十四日の夜、呼野の「大泉寺」では、お糸の霊をまつる「お糸まつり」が行われています。呼野の人はもちろん、遠くからもたくさんの方がお糸の霊をとむらいにやってきました。

※ 柿嶋譲／文・芹田騎郎／画 「北九州の民話お糸地藏」（あらしき書店）より再構成したもの。

26

石炭の神様

さとうけいたろうでん  
佐藤慶太郎伝



洞海湾を望む高塔山の麓ふもとに佐藤公園という公園があります。平成二十一年六月十四日あじさい祭りの日、ここに一体の銅像が建てられました。「石炭の神様」と呼ばれた、佐藤慶太郎の銅像です。では、彼は、どのような人物だったのでしょうか。

かつて、若松は、日本一の石炭積出港として、明治から昭和三十年代にかけて、隆盛を極めました。この若松で、明治時代から昭和初期にかけて活躍したのが佐藤慶太郎です。彼は、石炭の販売と炭坑経営を行う石炭商でした。彼は、石炭のかけら一つ見れば、どの炭坑から掘り出した石炭なのか簡単に見分けることができるほど石炭に詳しかつたといわれています。彼は、石炭を販売する仕事であるにもかかわらず、石炭の善し悪しが分からないと人様に販売できないとして、自ら危険な炭坑に潜っては石炭の質を調べたり、誰も手をつけなかった粗悪な石炭の使い道を研究し販売したりと熱心に仕事に取り組みました。その仕事ぶりから、「石炭の神様」と呼ばれました。さらに、石炭取引において、彼は、「正直を持って一貫する。」という言葉を大切にし、誠実に石炭の販売を行いました。その誠実な仕事ぶりに「若松の佐藤なら」と人々から信頼されていました。そのようにして彼は、誠実に働き、そして利益を上げ、会社を大きくしていきました。そして、彼は、アメリカの鉄鋼王アンドリュー・カーネギーという、多くの社会事業に貢献してきた事業家に憧れ、いずれは、自分自身もそのような生き方をしたいと考えていました。

大正十年三月十七日の朝、ある新聞記事が彼の目にとまります。「日本の工業が発達していき、世界に肩を並べるようになってきたが、芸術面では遅れが出ている。美術館ひとつ日本にはない。東京のような大都市に常設美術館がないのは問題だ。百万円ほどあれば建設できる。だれか心ある人はいないものか」というという内容の記事でした。彼は、ふと目を閉じました。しばらくの沈黙の後、彼は、東京府知事に連絡をとり、さっそく東京府美術館建設のために、建設費百万円を寄付しました。「百万円」…これは、現在の価値で約三十三億円になり、これは、佐藤慶太郎が経営する佐藤石炭商店の全財産の約半分にも当たる大金です。しかし、彼

は「私は学者でも政治家でもない。私にできることはまじめに働いて得た浄財を、世のため人のためにささげるといふ金銭奉仕」と淡々と語って百万円を寄付しました。また東京府から「美術館の名前は何にしましょうか」と尋ねられても「何でつちやよか」（何でもかまわない）と笑って答えたそうです。ですから、美術館の名前に「佐藤」の文字は残らず、「東京府美術館」として関東大震災の後建設されました。現在東京府美術館は、東京都美術館として現在でも二科展などの有名な美術展の展示が行われています。また、美術館の建設費だけでなく、彼は、生涯にわたって次のような寄付も行っています。

学生への学資金援助（返還義務なし）。

若松市立病院への病理研究室の寄付。

大正十一年 医学博士野口雄三郎のために、十六万円の寄付（病院の建設）

大正十三年 十万円を投じて、財団法人若松救療会設立。

昭和五年 福岡農士学校建設資金五万円の寄付。

国民の健康を研究・提案する佐藤新興生活館を百五十万円かけて建設。

では、佐藤慶太郎という人物は、大金持ちの社長でお金があまっているから寄付をしたのでしょうか。ここに彼の日常を記した記録があります。少し見てみましょう。

皆さんは、三十三億円も寄付する実業家の食事をどのように想像するでしょうか。彼の食事は、至って質素なものでした。朝は、ご飯（玄米）味噌汁。昼は、牛乳・リンゴ一個。夜は、ご飯・味噌汁・焼き魚・酢の物と彼は贅沢を好まず、むしろ質素な食事を好んだといわれています。また、東京に出張する際は、安い旅館を利用したといわれています。また、移動の自動車も今でいうグリーン車ではなく、普通の席を利用していただけといわれています。物も大事に扱い、剃刀かみそりの刃はぼろぼろになるまで使うといった質素けんやく節約の

生活を行ったといわれています。このように、彼は、自らは質素に、そして誠実に働き、その利益を世の中のために生かしていくという人生を送りました。彼は、昭和十五年になくなりました。そして、全財産百八十万円は、食糧協会経営食糧学校建設費。別府市美術館や体育館建設費、九州帝国大学国防工学研究所建設費、財団法人佐藤育英財団設立等にあてられました。

自分の事を多く語らなかつた彼ですが、生前一度だけ、頼まれて、座右の銘を友人に送つたといわれています。最後にその言葉を紹介したいと思います。

公私一如こうし いちによ

「自分で築いた財産であつても、それは、社会からの預かりものだと考えていた。預かりものなら、返すのは当然である。「私」をすべて「公」にお返ししてから、あの世へ旅立つ。」

※ 齊藤泰嘉著 「佐藤慶太郎伝…東京府美術館を建てた石炭の神様」(石風社) より再構成したもの。





## 28

# 理想を求めて海外で生きる

かわはらなおゆき  
(川原尚行)

私は、一九六五年に北九州市に生まれました。私の夢は医者になることでした。そこで、私は小倉高校を卒業し、九州大学医学部に進学しました。そして、一九九八年大学院修了と同時に外務省医務官として、アフリカのタンザニアの日本大使館に赴任したのです。

そして、五年後の二〇〇二年、スーダンの日本大使館に移りました。その年、世界各国は政府開発援助を打ち切ったため、スーダンには医療を満足に受けられない子どもたちがたくさんいました。

しかし、私は外務省の医務官だったため、日本人しか診療できなかつたのです。私は、病気で苦しんでいる人々を目の前に

「一人の医師として、何とかならないのか」

と自問自答し始めました。そして、悩み続けた結果、外務省を辞めることを決意したのです。

早速、現地の医師資格を習得して、スーダンの首都ハルツームの病院で外科医として働き始めました。この病院で働きながら、病院に通えない人々が住む無医村地区を回る巡回診療を始めたのです。

「やれることから」

という気持ちで巡回診療を決意させたのでしよう。

スーダンはアフリカ最大の国です。しかし、平均所得は日本の二十五分の一、平均寿命は六十歳弱です。すべての人がちゃんとした医療を受けられる環境にありません。それから五年後の二〇〇七年、私は首都ハルツームから五百km離れた無医村シェリワ・ハサバツラ村の診療所を任されることになりました。この診療所は州政府が建てたものですが、今まで医師不在のまま放置されていたのです。



医師不在の原因は、電気も水道もないことと民族同士の対立があることでした。その地に、外国人の私が行ったのです。最大の問題は、村人との信頼関係を築くことでした。例えば、巡回診療でいろいろな村を回ります。そこで、

「やあ、どうぞ」

と出された一杯の水、その水がどんなに濁っていても、私は飲み干して

「ありがとう」

と言います。村人に信頼されることが医師としてなによりも大切なことですから。

この村には、民族独自の文化が息づいています。その文化を排除するつもりはありませんが、考えさせられることもあります。例えば、一目で手に負えないと分かる栄養失調の赤ちゃんに出会いました。すぐに大きな病院に送りましたが、家族が病院から連れ出して、祈禱師きとうしのところ連れて行っただけです。その後、結局亡くなったと聞かされました。私が助けられなかった患者の一人です。

五歳以下の乳幼児の死亡率は千人中、日本では四人ですが、スーダンでは一〇九人です。原因は衛生面と栄養状態が悪いことです。きれいな水があれば、感染症にはならないのですが、その水さえもないのです。

私が運営している診療所の治療は有料です。それは、無償の罪深さを考えた結果の決断です。

「お金持ちの日本からドクターが来て、助けてくれる」

では、私がいなくなれば、診療所はまた廃墟はいきよになると考えたからです。ですから、スーダンの医師や看護師を雇って診療所を任せながら、日本から医師や検査技師を招いて技術を伝えたり、日本に連れて行き学ばせたりしています。最近、日本から、若者も研修目的でやって来るようになりました。中には、腰を据えてしまう学生もいます。彼らはいろんな体験をして確実に成長しています。

うれしい出会いもありました。昨年、北九州市で「集え、北九州のロシナンテスたち」というシンポジウムを開きました。北九州市立大の学生さんが協力してくれました。その中の一人が、今年二月スーダンにやって来たのです。彼は一年間休学してカナダに行く予定だったのです。しかし、私と出会ったのが運の尽き、

「何が、カナダや、スーダンに來い」

と言ったら、本當に來てくれたのです。私は、スーダンにやって來る若者と出会う中で、豊かな日本の中で、若者は目標や夢を探し続けているのだ、と受け止めています。彼らが

「スーダンを入り口として世界を知り、日本を振り返って日本について考え、そして、日本や故郷のために働ける人間に育てほしい」

と願っています。その夢の橋渡しをしたい、これも私の夢の実現なのかもしれません。私の診療所には、電気も水道もありません。慣れたせいとか、それを不便とは思いません。むしろ、豊かな日本にはない何か、何も無いスーダンにはあるような気がしています。

多くの人々から

「よりによって、なぜスーダンなの」

とよく聞かれます。私はその問いかけに、いつも

「それはスーダンと出会ったから。いつも目の前のものと向き合うことが、私の生き方ですから」と答えています。

私の診療所のある村には、コンビニもゲームセンターもありません。でも、少ない食べ物を分かち合い、輪になって飯を食い、満天の星の下で眠る暮らしがあります。

人間同士のきずな、自然と人間の調和：昔の日本にはあったのに、豊かになって失われたものが、スーダンには残されているのです。私はスーダンを支援しながら、実は私たちが学ぶべきものが多いことを感じているのです。

※ 毎日新聞記事「人として医師として〜川原尚行の挑戦〜」を再構成したもの。

## 30 まごじだこ 孫次凧に夢をのせて



平成二十二年一月二十四日、小倉北区の勝山公園芝生広場では、今年で四年目をむかえた新春凧あげ大会が開催されている。参加した数百組の親子の手作り凧が、子どもたちの笑顔を次々に青空へと運んでいく。

大会本部テントで凧作りを教えているスタッフの中に、戸畑区の〈カイトハウスまごじ〉の竹内義博よしひろさんがいる。

「凧と私は、長い一本の糸でつながっていたのかもしれませんが。」  
と、竹内さんはこれまでの人生をふり返る。

カイトハウスとは凧を作って売るお店のこと、孫次凧のまごじとは竹内さんのおじいさんの名前である。

おじいさんの竹内孫次まごじは明治時代の終わりごろから凧作りを始めた。その凧はよくあがることから〈孫次凧〉と呼ばれ、中でも形や色に特ちょうがある〈セミ凧〉は、全国的にも有名な凧の一つである。そんな〈孫次凧〉の伝統を受け継いでいる竹内さんだが、これまでの道のりは子どもころからの夢を順調にかなえてきたというものではなかった。

今から約五十年前になる昭和三十七年、当時、東洋では最大級のつり橋となる若戸大橋が完成した。竹内さんが生まれ育った戸畑の町は、八幡とともに日本の四大工業地帯の中心地として発展し、洞海湾どうかいわんをへだてた若松と直接この橋で行き来できるようになったのだ。しかし、この時、若松の発電所で働いていた竹内さんは、なぜか便利になった美しいつり橋の開通を素直に喜ぶことができなかった。

… 大橋がかけられた洞海湾は、立ちならぶ工場からの排水はらいによって〈死の海〉となっている。

… 大好きな空も、工場から立ち上る〈七色の煙〉によって鉛の天井のよう  
にふさがれている。

… 何よりも、子どもたちをはじめ、多くの人々が健康をうばわれて苦しい  
生活を送っている。竹内さんは、公害で汚れきった洞海湾とその上空を見つめ  
ながら、「工場を動かす電力を作る自分の仕事は、この町の自然をこわしてい  
く手助けをしているのではないだろうか。」  
という思いとたたかっていた。

やがて、おじいさんが亡くなると、いつしか〈孫次風〉も戸畑の空から姿を消していた。二十八歳になった竹内さんは、思い切っ  
て、発電所をやめて、農業関係の仕事についた。そして、日出子さんとの結婚をきっかけに民芸店を開き、〈孫次風〉を復活させる  
夢に向かって歩き出す決心をした。

「自然材料の竹と和紙と絵具で、昔から戸畑の町に伝わってきた郷土の風の素晴らしさを再現したい。」

しかし、それは簡単な道のりではなかった。風を作るおじいさんの姿を見ながら育ってきたものの、作り方を教えてもらったこと  
は一度もなかった。地元の竹を削って骨を組み、八女の手すき和紙を貼る。日出子さんが墨で下絵を描いて食紅で色づけをする。最  
後にバランスを整えながら糸目をつける。日出子さんとの二人三脚での作業を、おじいさんが残してくれた数々の風の見よう見まね  
で繰り返す日々が続いた。とは言え、竹内さんは、この努力を苦しいとは感じなかった。なぜなら、子どものころ、同じように失敗  
と工夫を繰り返しながら、近所の友だちと手作りの風で競い合って遊んだ楽しい思い出が、いつも竹内さんを励ましてくれたから  
だ。

… 今の子どもたちにも、自分と同じ楽しい時間を経験させたい。  
… 今の大人たちにも、その大切さをもう一度思い出してほしい。



【当時の洞海湾と煙におおわれた空】



： そのためにも、青空に舞<sup>ま</sup>い上がる〈孫次風〉を復活させよう。

日出子さんをはじめ、家族のみんなに支えられながら、竹内さんは一步一步自分の夢に近づいていった。

ちょうどこのころ、竹内さんと同じ願いをもつ人々の声が集まり、北九州市から公害をなくしていく取り組みも広がりをみせるようになっていた。きれいな自然環境を取りもどすためのきまりが次々につくられ、工場側もそれを守り、北九州市は再び〈孫次風〉が似合う町に変わり始めていた。

そして、昭和五十五年、竹内さんが作る〈孫次風〉は、福岡県特産工芸品に指定された。北九州市だけでなく、多くの人々から〈孫次風〉の素晴らしさが認められたのだ。夢へのスタートから九年後、澄<sup>す</sup>みわたった青空が美しい日であった。

現在、北九州市の第一回〈技の達人〉にも選ばれている竹内さんは、〈孫次風〉を受け継ぐ人というだけでなく、風の歴史を調べる人、風の楽しさを広める人、風の未来をひらく人という、様々な顔をもっている。風が生まれた国である中国をたずね、そこでのいろいろな国の風と交流してきた。小中学校や市民センターに足を運び、子どもたちに風の楽しさや作り方を伝える活動も続けている。

「大切にしたいものを一生の仕事にできたことが、人生にとって何よりも素晴らしいことだと感じています。」

竹内さんの次の夢は、昔の仕事だった発電を風の力で成功させることだ。高い空に高速で回転する風をあげて、その回転力から生まれた電気を地上に送る。この仕組みなら地球の環境を汚すことはない。竹内さんの次の夢をかなえてくれる風の試作品は、カイトハウスまごじに飾られている色鮮やかな風たちの片すみで、静かに自分の出番を待っている。



【よみがえった洞海湾と青い空】



北九州道徳郷土資料（小中一貫版 児童生徒用）掲載資料一覧

	資料名	内容項目	主題	参考区	引用・参考文献等	備考
1	しんくろうさん	低4-(3)	家族愛	(門司区)		
2	あきかぜに ゆれるコスモス	低3-(2)	動植物愛護	(若松区)		
3	わたしのハムちゃん	低3-(2)	動植物愛護	(小倉北区)		
4	ほこりのかがみ	中2-(2)	思いやり・親切	(門司区)		
5	学校の宝物～ユーカリの木～	中4-(4)	愛校心	(門司区)		
6	家族みんなで	中4-(3)	家族愛	(小倉北区)		
7	小倉南区の海と山～平尾台と曾根干潟～	中3-(2)	自然愛護	(小倉南区)		
8	特別な味	中4-(2)	勤労	(若松区)		
9	言葉はやさしく心は深く～詩人 みずかみかずよ～	中1-(5)	個性伸長	(八幡東区)	北九州市立文学館 「あっぱれかずよ」水上平吉著	福岡県版道徳資料
10	かな子の夏休み	中3-(2)	自然愛護	(八幡東区)		
11	山かさをつくる	中4-(5)	郷土愛	(八幡西区)		
12	洞海湾をおよぎわたった子馬ものがたり	中4-(5)	郷土愛	(戸畑区)		
13	郷土が生んだマラソンランナー・君原健二	高1-(2)	強い意志	(戸畑区)	朝日新聞社	福岡県版道徳資料
14	残されたかばん	高3-(3)	敬虔	(門司区)		
15	長崎の鐘	高3-(1)	生命尊重	(小倉北区)		
16	アユがもどってきた	高4-(7)	郷土愛	(小倉北区)		
17	たった一人の和太鼓職人	高4-(7)	郷土愛	(小倉北区)		
18	ミスタートルネード 藤田哲也	高1-(5)	真理・進取・工夫	(小倉南区)	藤田記念会	福岡県版道徳資料
19	大連からのプレゼント	高4-(8)	国際理解	(若松区)		
20	折尾神楽と出会って	高4-(7)	郷土愛	(八幡西区)		
21	取りもどせ 青い空と海	高3-(2)	自然愛護	(八幡西区)		
22	焚き火に情熱を注いだ一人の僧	3-(3)	畏敬の念	(門司区)	「石原宗祐・僧清虚・岩松助左衛門（ふくおか人物誌2）」 田郷利雄著 西日本新聞社	福岡県版道徳資料
23	アナタに会いたい ～「いぬのおまわりさん」大石真由美～	3-(1)	生命尊重	(門司区)	「いぬのおまわりさん」 大石真由美著 不知火書房	
24	地図にかけた生涯	4-(5)	公共の福祉	(小倉北区)	「海峡の風」轟良子著 北九州市芸術文化振興財団	
25	村を救ったお糸の物語	3-(3)	畏敬の念	(小倉南区)	「北九州の民話お糸地蔵」 柿嶋譲／文・芹田騎郎／画 あらき書店	
26	石炭の神様～佐藤慶太郎伝～	4-(5)	勤労・社会奉仕	(若松区)	「佐藤慶太郎伝 東京府美術館を建てた石炭の神様」 齊藤泰嘉著 石風社	
27	公害の町から環境都市北九州へ	4-(8)	郷土愛	(八幡東区)	「海峡の風」月刊「ひろば北九州」轟良子著 北九州市芸術文化振興財団	福岡県版道徳資料
28	理想を求めて海外で生きる（川原尚行）	1-(4)	理想の実現	(八幡東区)	毎日新聞社	
29	ドリーム～ギラヴァンツ北九州と共に～	1-(2)	強い意志	(八幡西区)		
30	孫次胤に夢をのせて	4-(8)	郷土愛	(戸畑区)		

〒803-8510 北九州市小倉北区大手町1番1号

**北九州市教育委員会  
指導部 指導第一課**

TEL 093-582-2367

FAX 093-581-5873

〒800-0037 北九州市門司区原町別院3-5

株式会社 福田印刷

北九州市印刷物登録番号 第1331060A号





**リサイクル適性 (A)**

この印刷物は、印刷用の紙へ  
リサイクルできます。

